

草創の大学建設を語る —学費値上げ問題と学生の自治—

正 木 正 明・寺 西 宏 友

司会 神立センター長より本日の講師紹介をかねてご挨拶申し上げます。

神立 本日は「創価大学の章を聞く」の3回目といたしまして、「草創の大学建設を語る—学費値上げ問題と学生の自治—」というテーマでお話をいただく企画をたてました。みなさまのお手元に配られております資料にもございますが、『新・人間革命』『創価大学』の章の50から57、ここで創立者池田先生は、当時の学生自治会の運動のひとつとして、学費値上げ問題について綴られております。

当時、理事会のほうから学費の値上げが提案されました。それに対して草創の先輩方は、「それはおかしい、学生中心の大学であるからには学生が自分達で考えるべきである」と、白紙撤回を要求し、その後、学生自らが値上げを決定いたしました。これは世間、とくに大学関係者、マスコミから非常に注目をあびました。なぜなら、当時の学生運動の多くが学費の値下げ運動であったにもかかわらず、創価大学は学生自らが値上げを決定したという出来事であったからです。当時の先輩方は、創価大学を自分たちで建設するんだ、その意欲に満ちて様々な活動に参画されたわけですが、その運動の中心的存在だったのが、学生自治会のみなさんの運動であったと思います。

本日は、1975年度学生自治会中央執行委員長をされてました正木正明さん、1977年度中央執行委員長をされてました寺西宏友さん、このお二人においでいただきました。正木さんは本学の3期生でありまして、卒業生の集まりであります、創友会の委員長をされておられます。寺西さんは同じく4期生で、本学の国際部長を務めておられる経済学部教授です。

お二人とも大変にお忙しい方ですが、今日はこの講演のために時間を空けて下さいました。お話をいただいた後、みなさんのほうからも質問をしていただければと思います。本日は有意義な学びの場とし、ともどもに創価大学の建設について考えていきたいと思いますし、そこに流れる創立者の熱き思いも学んでいきたいと思います。

それでは、ご登壇いただきたいと思います。お忙しいお二人にお越しいただいたことへ心から御礼申し上げ、あいさつとさせていただきます。

司会 それでは講演をしていただきたいと思います。まずはじめに、75年度中央執行委員長・正木正明さん、何卒よろしくお願いいたします。

Masaaki Masaki (学生自治会1975年度中央執行委員長)

Hiroto Teranishi (学生自治会1977年度中央執行委員長)

正木 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました正木でございます。今の紹介にありましてとおり、ちょうど30年前の昭和50年に創価大学の学費の値上げを学生が決議したという歴史を、創立者池田先生が小説『新・人間革命』に書いてくださっておりまして、その当時のことを語ってもらいたいとの要請をいただいて参りました。

あらためて「創価大学」の章を読み返しますと、まあこれほどまでに創立者が詳しく書いてくださっていたのかと驚きます。特に「創価大学」の章の50から57までの8回にわたって詳細に学費問題の経緯が描かれておりますので、これを読まればほとんど何の説明も、解説もいらなくらい、詳しく書いていただいております。お手元に資料として用意していただいておりますので、これは後でじっくり読んでいただきたいと思います。

今日、私は、この「創価大学」の章と若干内容が重複いたしますが、当時学生自治会の中央執行委員長としてこの問題に携わった立場から、学生の立場でどう捉えていたのかという視点から、皆さんにとって何らかのお役に立てばとの思いで話をさせていただきます。

さて、皆さんのお手元に当時の自治会新報の学費問題総括のコピーがあると思います。当時の資料に目を通すなかで、学費値上げ問題の経過と当時の創大生の心情が最もコンパクトにまとめられている資料だと思いましたので、今日はこの資料に沿って解説をするかたちでお話をさせていただきます。多分この昭和50年11月1日付の自治会新報のコピーは、創価大学のアーカイヴズの中でも非常に貴重な資料で、ここにきた皆さんだけが持っておられる資料になりますから大事にさせていただきたい。将来大変価値が出る（笑）、と思いますから。

まず前提として、創価大学が設立された当時の大学を取り巻く状況について最初に触れておきたいと思います。

創立者池田先生は昭和44年の第32回本部総会で、「現在、世間においては、各大学で紛争が続発し、既存の理念や方策をもってしては、律しきれない深刻な社会問題と化していることは、ご承知のことと思います。この果てしない泥沼に入った大学問題の実体こそ、新しい理念と思想による、全く新しい大学の出現を待望する時代の表徴であると考えたい。創価大学は、まさにこの時代の要望に応える新時代の学府でなくてはならない」と、このように述べられました。

実は、昭和43年から44年にかけて全国の大学で、学生による大学改革を求める大学紛争が勃発しました。その端緒は、東京大学のインターン制度をめぐる医学部学生の処分から起こった紛争と、日本大学の20億円の使途不明金をめぐる紛争に端を発しまして、全国の大学で紛争が多発しました。その運動はやがて大学制度そのものの改革を迫る政治闘争的な方向へと発展をして、学生による授業のボイコット、それから建物のバリケード封鎖などに発展をしたわけです。最大のヤマ場は、私も中学生の頃テレビで見た覚えがありますが、昭和44年の1月18日、東京大学の安田講堂を巡って、学生が安田講堂を占拠してバリケード封鎖をしました。それに対して8500人の警官隊がそこへ突入をするという攻防戦が展開されました。この日は神田の学生街でも学生によって道路が封鎖されて市街戦が展開されるという、その場面だけを見ていると戦争がおきているのかというような、そういう状況が繰り広げられました。この紛争で結局、昭和44年の東京大学と当時の東京教育大学の入学試験が中止になり、実は、東京大学には昭和44年度生は一人もいないという事態にまで発展をいたしました。この当時の文部省の発表では、38の国立大学と7の公立大学、21の私立大学が大学紛争が起きた「紛争大学」として指定されているわけです。

先ほどの創立者の言葉はこうした背景を知れば、より実感をもって捉えることができると思います。

この大学紛争、学生運動が問いかけた本質とはなんであったか。それは様々な背景を含んでいるわけですが、大学において学生の存在を無視して、そして封建的な秩序に支えられた大学当局のそういうメカニズムに対して、いかに学生主体の変革をなしようかという問いかけであったというように思います。まさにその目標とは大学における学生参加の追及であり、また大学自治、学生自治が貫かれた理想的学園共同体の構築にあったと思います。紛争大学が私立大学21大学に対して、国公立大学が45にのぼっている、倍の数になっているということも、国家の管理体制下にあった大学当局のあり方を鋭く追及したというその側面が明確に現れていると思います。

それでは本題に入っていきたいと思います。資料を見て頂きたいと思います。総括の文章です。まず昭和47年の10月に理事会から、昭和48年度の改訂学費値上げ案が全学に提示されました。実はこのまま案が通過していきますと、昭和48年に入学した私たち3期生の学費から値上げがなされていく予定でした。今思えば1期生、2期生の先輩に感謝しなくてはならないという立場なんです。しかし、学生はこの値上げ案に反対いたしました。その後こういう箇所があります。「最終的に学生側は、学生の生活に直接関わる学費問題に関し、前もって相談がなされなかったため、開学以前『創価大学の運営は、学生参加の原則を実現し、理想的な学園共同体にしていきたい』（二十一世紀の潮流）」という創立者の精神に反するものとして、学費値上げ反対、白紙撤回を理事会に要求した。」とあります。

ここで非常に重要な点が述べられています。実は、当時の先輩たちが学費値上げに反対したのは、値上げで学生が困るとか、また自分達学生の要求を聞けといったような次元では決してありません。むしろ、一方的に学費値上げを通告してきた理事会のやり方、これは「学生参加の原則を実現する」とした創立者の構想に反するではないか、その点が問題だということで反対をいたしました。表面的に見れば、一度値上げに反対した学生がその3年後の昭和50年に値上げを言い出すという、全く正反対の対応をした根底には、この「創立者の構想を実現する」という一貫したテーマが流れていたのです。そして理事会はその学生の要望に応じて、白紙撤回をしました。こうあります。「その結果、創立者の理想である学生参加の原則をふまえなかった点を深く反省し、今こそ、学生参加の具体的実現にふみださなければならない時であると痛感した。大学としては値上げをしなければ益々苦しいのが現状だが、それ以上に創立者のいわれた学生参加の理想的な学園共同体の実現を何よりも第一として考えたい」こういう理由で理事会は撤回をいたしました。

この学生側の撤回要求の趣旨と、理事会側の撤回理由には共通の理念が通底しています。それは「建学の理念である創立者の構想」、これを何よりも根本とし大事にするという一点です。

先ほど触れた既成の学生運動がなぜ大学当局と学生、教授と学生という不毛な対立を生んで、暴力抗争の中で挫折をしていったか。それは、既成の大学には、もはや建学の理念という、学生、教員、職員がともによって立つ共通の精神的基盤が有名無実化して、対立を止揚する地平を失っていたことに本質的な原因があると思います。

この理事会による値上げ撤回に対して、当時の学生の認識は「学費値上げ案は撤回されたが、学友の間では、『これは学生の勝利というものでもなければ終局点でもない。すな

わち今を出発点として、学生参加の実質的な第一歩がふみだされ、全学が一体となって創立者の示された理想的な学園共同体実現への闘いが開始されたのである。(10月31日付自治会ビラ)』とある通りでした。

その後、大学運営における学生参加の原則を確立する第一歩として、「全学協議会」の設置が発表されました。また学生側でも「学費審議委員会」の設置が決まり、学費問題に対する本格的な検討が開始されました。詳しくはその後に書かれている通りです。

昭和50年5月の第4回定期学生大会を契機として、年内に結論を出すべく、全学友によって本格的な論議が開始されました。その総括にこうあります。「この学費問題に関し、その方向を大学総体として検討していく端緒となるのは学生以外にはありえないという確認のもと、活発なクラス・ゼミ討論が開催された」。

これは昭和48年6月にサセックス大学訪問を終え、帰国後、基調報告に来学された創立者が「将来、皆が自主的に話し合って『これでは大学が大変だ、創立者が大変だ。自治会として、このぐらいいは値上げしようじゃないか』という時が来たら、学費を改定してください。(中略)それまでは、私が働きますから、安心して、現在の学費を継続してください」という言葉、また第2回創大祭における「私は諸君が、財政面の問題で悩まされず、のびのびと勉強できるように、また、先生方にも満足していただけるように、この生命をすり減らし、死に物狂いで働き抜きます。皆さんに心配をかけるようなことは絶対にさせない決心です」との創立者の話が、実は起点となっています。

この創立者の言葉は大変な重みのある言葉です。これは単に「学生が言い出すまでは学費は上げない」というような意志表明ではありません。「学生主体の大学運営」という理想を創立者自ら宣言し、究極の次元において実行された大宣言であると思っています。

近現代の大学の歴史にあって、学費の値上げを学生が言い出すなどということは、世界的なスケールで見てもおそらく例のないことであります。冒頭申し上げた日本の大学紛争の大きなテーマの一つが学費値上げ反対闘争であったということを考えれば、当時の常識では全く考えられないことであります。

そして学費問題の論議を開始した私たち学生にとって最大の問題は、「学生が値上げの方向を決めるといっても、すでに在籍している自分たちの学費は値上げされない。今後入学してくる後輩達の学費だけが値上げをされる」という一点にありました。これは自分たちに本当に学費値上げの決定権があるのか。決める自分たちは影響を受けずに、後輩だけにしわ寄せがいくのはあまりにも無責任なありかたではないか。そうした問いかけが一人一人の学生の胸中に刺さっていったわけでありました。

当時私は中央執行委員長として数多くのクラス、ゼミ討議に参加いたしました。今でも鮮烈な記憶として残っていますが、「後輩だけに負担を強要するなど納得できない。上げるなら自分たちの学費も上げてくれ」と涙ながらに訴える学友があらゆるゼミ討論の席上におりました。

おそらく当時の創大生にとって、創価大学と自分、創大生としての自己の存在をこれほど問われたことはかつてなかったのではないかと思います。大学運営に対する学生参加の問題と、一方では関わる学生側の責任というものは何なのか。ほとんどが四年間という短い期間しか大学との直接的な関わりがない中で、口先でいくらきれいごとを言っても本当にその責任を全うできるのか。そして何よりも一番苦しいのは、創立者を求めて集い来る、まだ見ぬ後輩達に負担がいくというこの点でありました。

当時のゼミの討論をまとめたアピールの中にこういう一節があります。「学費値上げが仮に行われたとしよう。だが実際に、値上がった学費を支払うのは我々ではない。学費値上げを是非できない新入生たちである。(法的にはどうであれ)自ら決議しながら自ら手を下さぬという倫理的矛盾は、単なる倫理の問題でありうるだろうか」と問いかけています。そしてカンパを募って、学債の購入にあてるとか、仮称「創価大学学生援助機構」を作って、創大の経済的援助の窓口を作ることなどを提案しておりました。

そしてこのような呻吟の中で「創大生としての責任」を問い続ける私たちがたどり着いたのは、まさに創立者池田先生の指導でありました。私たちはむさぼるように創立者の指導を読みました。そして、それは単なる学習運動などという次元では決してありませんでした。創大生としての自身のアイデンティティーをかけた戦いであり、創大生としての壮絶なる自己発見の闘争であったといえると思います。

そのキーワードともいえる言葉が「諸君こそ若き大学の創立者である」との一言でありました。

総括の中に「これは、自らが大学の創立者として、生涯、大学を愛し、守り、築くとの決意に立った、やむにやまれぬ心情の発露による学生自らの決議であった」とあります。

実は、創価大学の公式行事の席上、この昭和50年までに創立者は少なくとも3回「若き大学の創立者」ということについて述べておられます。

最初は第2回創大祭記念フェスティバルの席上、「一期生、二期生の諸君は、どうか自分たちがこの大学の創立者であると自覚をし、本気になってもらいたい。誰でも逃れることのできない宿命というものがある。そこに肚を決めたとき宿命は使命となって、その人の一生を輝かせるのです。私が諸君に期待する真心を汲みとって、創立者の学生になってもらいたい」。

また第3回入学式では、トインビー博士夫妻が池田先生との初めての出会いで、それぞれの母校であるオックスフォード大学、ケンブリッジ大学を池田先生が訪問されたことを、「最初に我が母校に行っていたいただいてありがとうございます」、こう御礼を述べられたというエピソードを通して、「在学中だけではなく、大学を巣立ってから、母校を誇りにし、温かく応援し、見守っていただきたい。(中略)いかなる地、いかなる場にあっても、母校を思い、母校を誇りとし、母校を盛り立てていく皆さん方であってほしい」と述べられました。

学費問題に直面して、自身の責任を問う中でこの創立者の言葉を読み返した時、どれほどのリアリティーをもって迫ってきたことか。新入生としてあたりまえのように観念的に聞き流していた一言一言が、計り知れない重みをもった言葉として私たちの生命に刻印されていきました。そして創立者はスピーチの最後で「一人一人が創価大学の代表者であるばかりでなく、創立者であるという誉れと自覚をもって、充実した学園生活を送り、更に豊かな人生への跳躍台としていていただきたい」と語られました。

また第4回入学式「創造的生命的開花を」の講演でも「諸君こそ私と同じく、若き大学の創立者であり、創造者であるという一点を、決して忘れないでほしい、ということなのであります。在学中のみでなく、生涯、創価大学を皆の手で建設し、守っていただきたいというのが、私のお願いなのであります」こう述べられました。

「諸君こそ若き大学の創立者である」という言葉を私たちはいかにして具体的実践、具体的な行動へと昇華すべきかをクラス、ゼミ討論で問い、語り続けました。その自覚と責

任を担いゆく決意なくして、学費問題に対することはできないというのが率直な心情であったと思います。

ここで私は、「若き大学の創立者」という言葉について、それをどう受け止めたかという私見を話してみたいと思います。もちろん言葉の定義をするつもりはありませんし、当時それに関して何らかのコンセンサスがあったというわけでもありませんが、自分なりにいくつかの項目にまとめてみたいと思います。

まず第一点は、「創立者池田先生の建学の理念に立つ人」ということです。創価大学の究極のアイデンティティーは、創立者の建学の理念しかありません。その共通基盤に立たずして、学生がそれぞれに勝手な主張、行動を始めれば何らの秩序もない混乱状況を呈するだけです。創価大学のあり方、創大生としてのあり方を問うならば、創立者の建学の理念に照らしてどうなのかという視点が何よりも重要であり、それを共有せんとする学生こそ、まず「若き大学の創立者」の名に値する人だと思えます。

次に「生涯大学を愛し、守り、見守り続ける人」ということです。先程紹介した三つのスピーチで創立者がすべてに共通して言われていることは、在籍する四年間だけではなく、生涯にわたって母校を愛し、守る人であってほしいということでした。しかし、この言葉が意味するものは、決して卒業したら寄付をしようとか、同窓会に集ってこようとかいう表面に現れる行為ではなく、むしろその根底に流れている自覚と決意、それを私なりの表現で申し上げれば「生涯創価大学人の自覚で生き抜く」ということであります。いずこの地にあっても、どんな立場であっても、何歳になろうと「私の原点は創価大学であり、その後の私はその延長にほかならない」と言い切れる生き方です。

次に三点目に「自分が創価大学に何を残せるかを問う人」という点です。総括の文章にこうあります。「学生参加とは、その形態を追求することにあるのではなく、単なる要求行為のみにとどまるものでもない。自己の全存在をかけた自らが、大学を守り、築くために一体何をなしうるか、また何ができるのかを自己に問いかけ、行動することである」と。

創立者は第3回入学式で「したがって皆さん方は、この創価大学を自分達でつくり、自分達で完成していく大学であるという認識をもっていただきたい。(中略)創価大学は、発足後間もない新大学であります。学風も伝統もまだ定かにはつくられてはいない。皆さんがつくりあげ、皆さんが積み上げていくべきなのであります」と。

どうか今日集われた学生の皆さんそれぞれの目指す分野で、またあらゆる機会を通じて「自分が創価大学に何を残せるか」これを問い続けながら学生生活を送っていただければと思います。

そして次に「建学の精神を踏みにじる行為とは断固戦う人」であります。思えば、学費問題の端緒となった最初の理事会提案の際、もし学生が問題意識をもたず行動を起こさなかったら、何の問題もなく値上げ案は通過をしていたと思います。しかし、そこで学生が行動を起こし、「学生参加の原則をふみにじるもの」として抗議したが故に、理事会もその姿勢を正したのであります。

それが淵源となり、創立者の建学の理念である「学生参加の原則」が確立されたわけがあります。

どうか皆さんも自らに厳しく問いかけるとともに、建学の精神を踏みにじる存在、行為に対しては断固戦う人であっていただきたいと思えます。

以上が私なりの受け止め方であります。あの当時、学生自治会の発行する印刷物の中で、

私たちはよく「創価大学人」という言葉を使いました。「創価大学人」という意味は、教員、職員、学生という立場の違いを超えて、創立者の構想を共に実現するものとして平等の自覚と責任に立つということです。この思いは私自身の胸中にも今もあかあかと燃えています。あれから30年の歳月が経過しました。皆さんの先輩の一人として、今申し上げたことが具体的にどこまで実現できたのかを問えば反省することばかりです。しかし私は「創価大学人」としての生涯を最後まで貫き通したいと決意しています。

最後にもう一言申し上げて終わります。今日何度も引用させていただいた第3回入学式での創立者のスピーチ。その最後に語られた言葉が私の人生の最大のテーマとなっています。

創立者は言われました。「最後に、私のこれからの最大の仕事も教育であり、私の死後三十年間をどう盤石なものとしていくかに専念していく決心であります。それは、二十一世紀の人類を、いかにしたら幸福と平和の方向へリードしていけるか、この一点しか、私の心にはないからであります。その心から、私は皆さんに、人類の未来を頼むと申し上げておきたい」こう語られました。

池田先生は本年77歳の年齢を迎えられ、益々お元気に世界平和への闘争を展開されています。いつまでも、そして益々お元気で健勝に、長寿であっていただきたいというのが、全世界の友の願いであります。また皆さんの願いでもあると思います。しかし今ご紹介したスピーチに象徴されるように、誰よりもご自身の後のことを考えておられるのも創立者であります。このスピーチを直接伺った者の一人として、終生自分自身にその実現を問い続け、責任を果たすべく戦い続けなければならない、こう決意をしております。

私は本年春の創価教育同窓の集いにおいて、卒業生の思いとして創価大学に「池田大作研究センター」の設立をと呼びかけました。それは、「二十一世紀の人類を頼む」、「私の死後三十年間をどう盤石なものとしていくか」と言われた、創立者の構想を実現する道、それは創立者の思想と哲学を世界へ世紀へ万代へと流れ通わしめる以外にないと確信するからであります。そして創価大学こそ、その電源地、発信地でなければならない、それこそが創価大学の最大の使命であり責任であると思うからであります。

この総会でも申し上げましたが、池田先生との対談「対話の文明・平和の希望哲学を語る」を展開されているハーバード大学のドゥ・ウェイミン教授は、2004年1月東京で開催された「第19回国際宗教学・宗教史会議世界大会」に出席し講演を行いました。その席上ドゥ教授が「現代は第二の軸の時代を迎えているのかもしれない」と発言し、一般紙などに大きく取り上げられました。

この「軸の時代」とはドイツの哲学者カール・ヤスパースが提示した概念で、釈尊、ソクラテス、孔子、そしてキリストの先駆といわれる第二イザヤが出現した紀元前8世紀から紀元前2世紀の時代をさします。この時代にその後の人類の精神世界をリードする思想の原型が生まれたとするものです。

そしてヤスパースは、農業革命に匹敵する産業革命が起き、世界が大変革を遂げているにもかかわらず、その指導原理たる新たな思想、哲学はまだ現れていない。今こそ第二の枢軸時代として釈尊、ソクラテス、孔子に匹敵する思想家の出現が望まれていると言いました。ドゥ・ウェイミン教授の発言はまさに現代の世界が抱える本質的な危機感に立つて、それを克服する思想とそれを説くリーダーの出現を待望しているわけです。その第二の枢軸時代の人類をリードする指導者こそ、創立者池田先生をおいて他にはいないということ

を私たちは誰よりも知っております。

そして我が創価大学の使命は、世界へ世紀へ創立者の思想と行動の真実を訴え、また自身の生涯において、それぞれの立場で池田思想を具体化する闘争に全生涯をかけて取り組んでいくことであると思います。

釈尊も、ソクラテスも、孔子も、そして時代は下りますがキリストも自分自身では一冊の本も、一行の文章も残しておりません。釈尊の思想は十大弟子の一人であった摩訶迦葉をはじめとする弟子が仏典結集という行為を通して残りました。また、ソクラテスの思想はプラトンが、そしてキリストの思想はパウロやペテロが残し、その後の弟子が体系化し世界精神へと昇華していったのであります。その原理はまったく同じであります。

私は、池田先生を創立者と呼び、先生の思想と哲学を建学の理念と呼ぶことのできる創大生ほど幸せな存在はないと思っています。私も含め、それぞれの使命の立場で、生涯「創価大学の創立者」としての自覚を持ち、誉れを持って、誇り高く前進していきたいと思えます。皆さんの益々のご活躍とご健勝をお祈りして、つたない話ですが私のご挨拶とさせていただきます。有り難うございました（大拍手）。

司会 大変に貴重なお話、誠にありがとうございました。それでは引き続き、77年度中央執行委員長の寺西宏友さん、よろしくお願いいたします。

寺西 こんにちは。今日はお忙しい中と、先程神立先生が言われていましたけれども、私はもともと創価大学に職場がありますので、別に私が来ることには何の意味もないんですけれども、正木さんが駆けつけていただいたことに今日の意味があると思います。

私は4期の入学でございまして、創価大学は我々が入学して完成年度を迎えました。當時は学年ごとにキャッチフレーズというものがございました。1期生は、「花の1期生」というふうに自称されておりました。2期生は誰言うともなく、「谷間の2期生」と言われておりました。そして3期生は、自ら「本門の1期生」というふうに称されておりました。

これには理由がございまして、1期生というのは創価大学の歴史を振り返ってみても、ありとあらゆる成果というか、数字的にみて、1期生を超える学年と言うのが未だかつてないということです。司法試験の合格者数であるとか、公認会計士の合格者数であるとか、大学の教員になっている人の数とか、わずか700人、800人という1期生の数ではありますけれども、どの数字を取ってみても、1期生というのは突出しているわけです。現在は毎年1700人の卒業生を送っているわけですが、1期生のありとあらゆる成果達成の数字というのにはかなわないと言う意味で、本当に1期生というのは凄い。そういう意味で「花の1期生」というのはどうしようもないな、と思います。

2期生は置いておきまして（笑）、3期生が「本門」の1期生と称した理由、実はこれは創価大学が本来開学をされる予定が昭和48年、すなわち3期生が現役で入学する年度が本来の開学予定年度でございました。そのことから、3期生の方々は自らを「本門の1期」と、別に1期、2期を迹門と言ったわけではないんですけれども（笑）、新たな大学建設の主体者という自覚で自らを「本門の1期」と称されたわけです。

では、我々4期は何と呼ばれたか。みなさん見当がつきますか。我々、入るなり、「無知の4期」と呼ばれたんですね。大学の淵源とか、創価大学の根源とか、そういうことに全

く無知であると。要するに何も知らないということで、「無知の4期」という大変に不名誉なキャッチフレーズを頂きました。でもそれは本当に入ってみてその通りだと思いました。というのは、今、正木さんからお話いただいたとおり、学費問題ということ一つとってみても、1期生、2期生、そして3期生の在学中に大変に大事な出発点の刻印がなされていたわけですね。我々はともすると4期が入学したときには本当に知らなくて、ずっと過ごしている人もいっぱいおりまして、なかなかそういうことを知る機会もありませんでした。意識してきちんと創価大学の由来とか、先生の創価大学にかける思いとか、これを知る努力をしないといつまでたっても我々は「無知の4期」だな、という自覚がございました。

こういう意味で、我々4期としてはしっかりと先輩について創価大学の歴史を身につけていかなければならないという思いを強くしておりました。

二つ目のお話として、正木さんが中央執行委員長を終えた後、同じく3期生の西山さんという、今は大学の職員として働いていらっしゃいますが、その方が中央執行委員長になられまして、私はその西山中央執行委員長の下で書記長という立場で補佐をさせていただきました。

創価大学が昭和46年に開学をして、正木さんが中央執行委員長であった昭和50年。この4年間、この時期というのはまさに石油危機の影響、また大変なインフレーションの嵐という中で、相当な額の赤字が蓄積しておりました。

それで正木さんの代で学費問題の解決の一つの端緒を築いていただいて、翌年度の学費を値上げするという決議をいたしました。それで若干、創価大学の財政状況の好転にはなったと思うんですけども、根本的な解決にはなっておりませんでした。

それは多少の学費値上げで解決できるような赤字ではございませんでした。だからといって一気にそれを解消するような値上げをすることも不可能であるということで、翌年度、西山さんの代に、もう一度理事会のほうから翌年度の学費値上げについて検討をお願いしたいという要請がありました。

これについて我々としても悩みましたけれども、やはり創価大学の存続に関わる問題ですので、簡単に「ノー」とはいえません。前年度の正木さんの代と同じプロセスで、真摯に全学生に意見を聞いて、翌年度の学費値上げの是非を問うたわけですが、ここでも先ほど正木さんからご紹介いただいたような、大変に熱い意見が学生の中から寄せられました。最終的に秋に臨時大会を開きまして、翌年度の学費をさらにまた値上げするという決議をいたしました。

そしてその翌年の昭和52年、私は4年生になりまして、学生自治会の中央執行委員長ということで選挙で当選をさせていただきました。1月、2月、3月と、ここにいらっしゃる杉山先生とか、神立先生とか、みんな仲間でしたけれども、みんなで翌年度の活動方針について話し合いをいたしました。当然、学生自治会の活動方針の大きな比重を占める内容はやはり学費問題で、この問題についてどう対処するのかということでした。正直言って、創価大学の財政状況からいけばもう一度値上げをする、あるいは毎年値上げを続けるということをやっても解消できないほどの赤字という問題があるわけですから、これは毎年やらざるを得ないという、一つはそういう判断がありました。しかし、この学費問題というのを2年連続、全学的な問題として学生自治会のメインテーマとして掲げて行った一つの反省として、それ以外のことは一切何もできないというぐらゐの大変な精力を要しま

した。それはもう先ほど正木さんの方からお話があったとおり、自分たちの学費のことじゃない、要するに自分達の後輩、これから入ってくる創大生の学費について審議するわけですから、これはそんないいかげんなことで決めるわけにはいかない。当然真剣な議論が必要になるわけですし、それをやっていくためには大変な時間も労力も必要でした。学生自治会の運動というのは決して学費問題だけをやっておけばいいということでもないという思いもありました。

その意味で創価大学の存続を考えると、やはりそこには抜本的な解決を何とか見出さなければいけないだろうという思いもありまして、学生自治会の執行部として提案をさせていただいたことが、翌年度の学費値上げの審議は凍結をしたいということです。翌年度上げるか上げないかということを議論するだけで手一杯になってしまいますので。そのかわり、抜本的に創価大学の学費のあり方について、理事会ときちんと協議をして、全学的に一つのルールを作りたいという提案をさせていただきました。

当時はまだまだインフレーションの嵐が収まっておりませんので、年々物価が上昇するという傾向にございました。物価の上昇によって、創価大学を維持運営していくためのコストも増加するわけですから、これは、自然に学費に反映していくというのはあり得る話だろうと我々は考えました。当時は物価スライド制と申しましたけれども、そうしたコストが自然増する分については当然カバーする形で学費を上げていくという、そういうルールを作ろうということを提案申し上げました。

これは学期があげ新年度の4月に、早速学生自治会の年間活動方針の一つとして、全学協議会という理事長、学長、学生、職員、教員、全構成員が集まって協議をする場で、学生自治会の年間活動方針としてお伝え申し上げました。

ほぼ半年かけて、その年の12月に臨時学生大会を開催いたしました。3年連続で臨時の学生大会をやったことになりますけれども、そこで理事会と協議をした具体的な物価スライド制の案について審議をして頂いて、出席者全員の賛同を持って決議を頂きました。

その時にですね、学生大会の最後に中央執行委員長アピールというのがあります。正木さんもされたと思いますけれども。当時の学生大会の審議というのは直接民主主義というか、われわれの頃は延々とやっていました。参加している人は非常に疲れる。一応議決が終った、やれやれ、もういいなこれで、ということで、みんな立ち上がって、中央執行委員長アピールというのは、会場を去りながらなんか言ってるなあと聞いているのが習慣だったんです。私は、是非自分のアピールは参加者に聞いてもらいたい、という思いがあって、登壇をして最初に、「寺西宏友、一世一代のアピールをさせていただくのでどうか皆さん聞いてください」と切り出しました。ここまでいうとさすがに立って帰る人はそんなにいませんでした。そこで私が申し上げたのは、ある一人の女子学生のことでした。学生大会の当日の朝か前日だったと思うんですが、彼女は、わざわざ私のところを訪ねてきて、「決議について一言いわせて下さい」といつてきました。その方は、新聞配達をしながら奨学金を頂いて創価大学に来ている人でした。その方が、「ぜひ自分も学生大会に臨んでみんなの前で言いたいことがあるんですけれども、学生大会の時間は新聞配達でいけない、新聞の折り込み広告を入れて、夕刊の配達的时间で参加できないので事前に一言いわせてください」ということで私に言われたことがございました。それは、彼女の家庭の事情、でも創価大学で学びたかったという気持ち、それを実現する一つの形として新聞奨学生になって創大生になれた、ということを語られまして、「学費の値上げて言うのは創価大

学を愛する一人としてやむをえないと思いますけれども、やはりそれでもお金がなくても創価大学で学びたいと思う人が少なからずいるということは、絶対に忘れてはいけないと思うんです」ということを語っていただきました。そのことを私は全学生に伝えなければいけないと思いまして、アピールの中でお話をさせていただきました。そして何故そんな話をしたかという、ある意味でいえば、3年連続で同じような討議をやり、3年連続学費の問題を学生大会で決議をして、3度やればどんなことでもルーティン化してしまう。あるいはその中にマンネリというものが当然でくるし、正木さんの代でやった時のような熱のこもった創大生の学費問題に対する取り組みというものもずっと続くものでは絶対無いと私も思いました。創大生はもっと違う形で、正木さんのいう「創価大学人」としての責務、あるいは活躍、違う分野でもっともっと果たすことができるはずだと思ひまして、学費問題ということに学生自治会が3年連続で取り組んだという歴史を創価大学の歴史の中で絶対に風化させたくない、昔話、化石のようにしたくない、という思いだけは強くありました。そのことを今日この場に集ったみんなで確認しあおうとそういう趣旨でアピールさせていただいたことを覚えております。

もう一つ最後に申し上げたいことは、これは決して昔話、「そういう時代の話だったんですね、今の私たちには関係ないですね」、ということではないということです。

実はこの学費問題というのは、正木さんからご紹介いただいた、先生が自分の生命を削ってでも財政的には支えるから、みんな勉強してくれ、学費のことは心配するなど、何度もうこういう話を学生にしてくださっていた。そういう状況の中である当時の教授、教員の中で、いろいろな事情があったとは思いますが、「創立者というのは大学の運営には口出しをしてほしくないな、創立者というのは金さえ出してくれたらいいんだ」と、そういうようなことを学生に言ったことがございました。早速学生自治会の役員が、その発言をされた教授のところへ行き、真意を正すということもございました。これは、池田先生の創価大学に対する思い、そして実際に支えている、どんな思いで支えているか、これをわからずして創価大学の一員たりえないだろうという熱い思いが学生の中にありまして、すぐさま飛んでいって追及をしたという経緯があります。これは、今の我々も同じだと私は思っています。

この創価大学は34年、まもなく35年ということになりますけれども、やはり、何といっても創価大学があるのは、池田先生という存在があって、先生が生命を削って戦って大学を作られ、支えてこられたという、この歴史を軽んじるようなことは、創価大学の構成員としては誰人であろうとも許されないことだと思います。これは「創価大学人」あるいは創価大学で教員、職員、学生という身分でいる限り、ごく自然な帰結だと私は思っています。

実は昨日、コロンビア大学という一流の大学のティーチャーズカレッジ、教育学部のデビット・ハンセン教授が、創価大学にお見えになりました。この方は、ジョン・デューイという教育学思想家、アメリカを代表する教育学、教育哲学者の研究の第一人者の方で、大変に私は感動したんですが、デューイの言葉の中に、民主主義というのは「内なるモラル」の集積の結果達成されるものだというような趣旨のお話がありました。

これは学生自治の運動というのは、まさに一人一人の学生の中にあるごく自然な内なるモラル、押し付けられたものでもなく、金科玉条でみんなで共通のことをいわなければならないというようなそういうものではなく、一人一人の生命の中にごく自然にある、「当

然これは」という、そういうものをお互いに確認して積み上げていく作業、これが学生自治の運動の本質であろうと思います。

今の学生の皆さんも本当に創価大学の魂、創立者池田先生が存在、そしてその魂を守り続けていくのが学生自治の運動なんだということをどうか銘記して頂いて、それを考える一つの具体例として、学費値上げ運動に関する、正木さんと私の話を捉えていただければと思います。

以上で終わります。ありがとうございました（大拍手）。

司会 大変にありがとうございました。それでは、せっかくの機会ですのでお二人に何か質問があれば是非手を挙げていただきたいと思います。

学生 今日は大変にありがとうございました。入学されたときから学費問題に関して多くの議論と時間を費やされたと思うんですけども、学費問題以外にも自治会としてやることがあったといわれましたが、仮に学費問題というものがなかった場合、どのようなことをされておられたのかなあと思いました。一応僕も草創三部作をはじめ先生のいろんな指導を学んで、やはり先生が望まれている創価大学の使命は、まだこれから多く作っていかねばならない、成していかなければならないものがたくさんあると思うんですけども、草創の先輩方お二人は、もし学費問題がなかった場合、自分自身の力をどのように発揮されて、どのようなことをなされていたのかということ、またどのようなことをなさそうとされていたのかなということをお伺いしたいと思って質問させていただきました。

正木 学費問題がもしなかったらという質問はですね、それに真っ只中で関わったものとしては想定できない世界で、たまたま自分が3期生として入って、そのときに、先輩たちの努力を結実させるときに、自分が学生自治会にいたという意味で言えば、私自身にとっては、この問題がなかったらという想定自体が成立しないという思いです。

ただ、寺西さんが言ったことで非常に重要だなと思ったことは、学費問題も本当に重要な問題だけれども、もっとなすべきことやらなければならないことはたくさんある、本当にそうだなあ、と。

実は私たちは昭和50年の10月の学生大会で値上げの方向で決議をしたときに、これで一つ学費問題の大きな端緒についた、これからは、創価大学が一応4年間という歳月を通して5年目に入る、これからは建設第2章だという言い方をしたんです。だから先ほどの寺西さんのお話を伺っていて、なるほどそうだ、と。いつまでも学費の論議にかかわっているわけにはいかない。他にやるべきことがあるよ、と思ったというのは本当にその通りであり、それは正しかったし、そうでなければならなかった。毎年同じような論議を繰り返すことに何の意味があるのか、ということを考えれば、正しかったなあというふうに思います。

私は、寺西さんと違って勉強が出来ないほうでしたから、肉体的、体育会系の道を歩み、今も続けています。

今おっしゃったのを聞いて、創立者の草創三部作という名前がついていたことをはじめで知りました。そこで先生がおっしゃっていることは新しい思想・哲学、21世紀の人類を救済し新しい文化を創造していく思想・哲学の発信地であれということです。このことを、

創立者は、あらゆる場面でずっと述べ続けておられます。そして、単なる偏狭な人間中心主義ではなく、人間というものを根幹とした新しい学問の創造、そういう意味では本来なすべきことといったこと、創価大学の最大の使命は新しい文化の創造であり、学問の創出であり、思想・哲学の創出ではないかと。そこに向かって戦い始めた。面白いのは、さっき1期、2期、3期という話をしていましたね。3期生というのは、高橋先生はそこにいらけれども、学者というのはあまりいないんです。どちらかというと肉体系の、単純に言えば行事が好きというタイプが多くて。ところが4期生というのは、神立さんも寺西さんも杉山さんも、今日ここにいらけれども大学の教員として残っている。そういう意味では本当にさっきの建設第1章で土木工事が終わって、その上に建物を建てるのが4期生の使命だったんだなと思いながら話を聞いていたんですが、本来やるべきことというのは先生がああ講演で要望している学問であり、新たな学問の創出であり、新しい文化と思想・哲学の創出である、そういうことを自己反省を含めてははっきりいうと、その最大のシンボルとしての池田大作研究センター、それを言った限りは、あのときに論議をした限りは、私の責任としてやらせていただこうと。それは卒業生の総意であつたし。私が言う前に大学のほうで十分考えていたんですよ。ただきっかけを作らせていただこうということです。答えになってるかはわかりませんが。

学生 ありがとうございます。

司会 それでは他に質問のある方、どうぞ。

学生 貴重な講演ありがとうございます。一つお聞きしたいのは、今後の未来に向けて今は我々現役生がすべき一番大事なことは何かということと、これからの創価大学に一番必要なものは何かということをお聞きしたいと思います。

正木 私が聞きたいぐらいです。その質問を誰かにしてみたいという思いですが、その問題を考えるにあたって一つには皆さんが今、創立者との関係において、また創価大学の伝統において当たり前だと思っていることは、実は創立者が存在しているからこそ成立していることが多いというか、ほとんどすべてがそうである。先生がいらっしゃらなくなる、そういう時代が到来したときに本当にそれが崩れざる伝統として構築されているのかという問いかけですね、それは非常に重要だと思っています。

あえて申し上げれば、私は創価学会の幹部をさせていただいておって、最近も実は、創価大学の学生部の皆さんにもお話させていただいたんですが、仏教史をかじっていく中で、非常に象徴的な言葉を目にしました。一つは、著名な仏教学者である中村元さんという東京大学名誉教授の著作を読んでいた時に、釈迦教団がなぜあれほど簡単に分裂をしたかということに論及して、実は釈尊の教えを一人の弟子として真剣に実践した弟子はたくさんいた。しかし、釈迦教団の存続という責任感に立った弟子は皆無に等しかった、という言葉の中村さんが書いています。また、違う学者の仏教史の同じテーマに関する著作の中で、実は釈尊滅後の教団が100年から200年をかけて上座部と大衆部に分かれ、そこから更に分かれていったが、実はその分裂の萌芽は、もう滅後50年ぐらいから始まっていたんだと。逆に言えば、なぜ釈尊滅後50年ぐらいは分裂しなかったか。それは釈尊の説法を直接聞い

た弟子が生き残っていたから、という見解を示している。

私は、この大学の母体である創価学会という団体、これを人類の宝として絶対に永続させたいし、そのことが私自身の道だと、こう思っていますが、実は過去の歴史を振り返ると、そういう分裂というもの、また崩壊、それは善と悪との戦いの中では起きないんだと。そういうはっきりと分かれる場合は善が負けるか、悪が負けるかという問題はあっても、実は当事者にとっては善と善との対立、正義と正義との対立なんです。その中で、分裂とか崩壊というものが起きていく。

そういうものに向かって、それをいかに回避する道を作り上げていくか、そんなものは個人の一生という、50年、100年の単位では当然出来ないと思うんです。しかし、何百年という歳月をかけて、そこまで本当にもつかという問題もシビアに見ていかなければいけないけれども、やっていかなければならないということを考えると、そこに果たすべき創価大学のあり方、使命は決定的なものがあると見ています。何百年という単位での闘争、関係性、連続性を考えたら、大学という場でしか多分できないだろうということも考えています。今何をなすべきかと問われたら、具体的なことはいっぱいあるが、そういう責任感と自覚にたった創大生としてのあり方をまず自分に問いかけることからすべてがスタートをしていくと思います。その上で、自分が携わった学問の分野、クラブ活動の分野、あらゆる行事での戦い、一つ一つを自分自身に対してそれを問いかけながら、さきほど申し上げたいかなるものを大学に残していくのかという視点で、自分の生き方を見ていってほしいと思います。非常に観念的ですけど、すみません。

司会 それでは最後にもうひとつだけ、どうぞ。

学生 本日はありがとうございます。具体的なことというよりはですね、今日も本当に貴重な時間を割いてくださっているんですけども、なぜそこまでしてくださるのか、その情熱の源というか、なぜ後輩のためにそこまで動いてくださるのかなあとか、そこをお聞きしたいと思います。

正木 「そこに創大生がいるからです」と答えたら非常にかっこいいでしょうね(笑)。私が先程お話したのは、なぜあなたは今ここに来たのかという思いの根源の部分話をさせていだいたんですけどもね。その生涯大学を愛し、守り、見守っていくという言葉のもと根底にあるのは、生涯創価大学生として生きるという、生き方そのものではないか。私の原点は創価大学にあり、今もその延長であるという生き方をしていく。実は、ものすごく卑近な言葉で言いますと、私みたいな特に能力もない人間が、がんばってこれた背景にはやはり、学園、創価大学の時代に、池田先生から、様々な訓練を頂き、御恩をいただいた。自分が駄目であれば、先生の顔に泥を塗るではないかという思いの延長ですよ。自分がどう思われるのかという問題よりも、自分に対する評価は創価大学の評価になり、創価学園の評価になる、という意識で生きてきましたし、それが創価大学人としての人生だと思ってきました。

創立者が創友会の総会で、「諸君たちは生涯創価大学卒業という看板を背負って生きていかなければならない」という言い方をされた。ならばその創立者との原点、生き方を生涯の生き方にしていこうと。もっと言えば自分が卒業した後、創価大学が発展してくれなけ

れば私の人生は完結しないんだと。あんたたちがいた時代はよかったけど、後になってぼろぼろになる一方ですよといわれたら、自分の人生は完結しない。綺麗事ではなく、本気でそう思っています。そう考えると、学生の皆さんに話ができるという機会、チャンスがあれば、本当に来させていただきたいと思っています。今、創価学会のほうでは割と忙しいんですね（笑）。でも、早くこういう時代が過ぎて、もっと大学に来れる機会が増えないかなあという思いです。こうやって来ている理由は、創価大学が磐石であって、発展してくれない限り、自分の人生は完結しないと思っているからです。

司会 まだ質問のある方もいらっしゃると思いますが、時間になりましたので、最後に一言ずついただければと思います。

寺西 正木さんのおっしゃるとおり、池田先生の恩に報いていくという、最大のホシは、池田先生の生命そのものである創価大学をやはり永遠に存続させていくことだと思います。

私なりの考え方としては、創価大学という存在ですけれども、先ほど申し上げた「内なるモラル」という、こういうもので規律が保たれていく集団、これは永遠に発展していくと思うんですね。それはどこから規律、ルールを押し付けられるような組織だと繁栄というものがなくなるんじゃないかと思っています。その意味で、正木さんがおっしゃったとおり、この大学の4年間の中で、一人一人の「内なるモラル」という、内なる規律みたいなものをしっかりと自覚をして、お互いにどういう規律、規範をもっているのかということを確認しあって、その中で、自分たちで自発的に自分たちの集団の規律、ルールを作り上げていく力、これがやっぱり一番大事なことだと思うんです。もう少し具体的に申し上げると、皆さんの所属しているクラブであろうと、ゼミであろうと、寮であろうと、どこであろうと複数の人間がいるところではルールがあると思うんですね。それがいつの間にか誰かの都合で出来たルールであったり、今までやってきたからこうだというものであったり、という部分がないかということですね。そういう目でもう一度見て、自分たちの納得のいくものを作ろうという作業、これをやるということはものすごい訓練になると思うんですね。

ぜひそのような力を身につけていただいて、今の社会にモラルがないと嘆く人は多いんですけれども、そうじゃなくて、モラルを作り上げる力がないということを我々は自覚をしたいと思うんですね。声を大きくして、「これがモラルだ、みんな納得しろ」というのは絶対だめです。その意味で、ぜひ身に付けなくてはならない力を自覚して取り組んでいきたいと思っています。私も皆さんと一緒に大いに話し合いをしていきたいと思っています。

正木 本当に今日はご静聴いただいてありがとうございました。私だけではなくて、いろんな先輩が社会で活躍しております。こういう機会をどんどん持っていただけたら、どんどんそういう卒業生が大学に帰って来られる、そういうこともまた、卒業生の同窓会としても考えさせていただきたいと思っています。

ともかく皆さんが生きていく時代、創価学会の言葉でいえば次の50年、それが万代を決する50年になろうと思います。そういう意味では、大変大事な、おそらく皆さんの人生そのものが永遠を決した、または崩壊の引き金になったといわれる、どちらかの選択しかない50年であるということを、自分自身に問いかけながらがんばっていただきたい。先輩と

して、しっかりその道を開いていく戦いをして参りますのでよろしくお願いします。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。お二人にもう一度盛大な拍手をお願いしたいと思います（大拍手）。それでは以上で本日の講演会を終わりにさせていただきたいと思います。本日は大変にありがとうございました（大拍手）。